

山形弁ラップ 故郷うたう

「かえすのながさはえすば
へつで」

山形弁だけで紡がれた2分
47秒のラップ調の曲。失われ

つつある故郷の方言を憂え
て、ミュージシャンとして約

30年のキャリアを経てから作
った曲は、いまや代表曲とな

った。

冒頭の言葉は、「これの
中にそれを入れて」という
意味で、県内のホームセン
ターで偶然発した言葉だ。歌
詞は耳に残ったフレーズを、
語感の良さで会話風に羅列し
た。

趣味で作った曲だったが、
地元民しか理解できない歌詞
が評判となり、CD2000
枚が完売した。「これまで故
郷に何も貢献してこなかった
からこそ、昔の古里の姿とか
を伝える使命があるのだと思
う」と語る。

◇

フォークソング全盛期の1
970年代。地元・天童市に
もブームの波が到来し心を躍
らせた。小学5年で初めて触
ったアコースティックギター
は、「弦をはじく感覚がただ
ただ心地よかった」。憧れは

募り続け、けがをした際に母
から「何か欲しいものは」と
尋ねられ、すかさず、「ギタ
ー」。3万円ほどのフォーク
ギターを買ってもらった。「母
はお菓子や漫画本くらいを想
像していただろうが、熱意を
くみ取ってくれたのかもしれ
ない。あの時買ってもらえて
いなかったら、今の自分はな
かったかも」と苦笑する。

◇

上京し、89年にシンガー・
ソングライターとしてメジャ
ーデビューしたが、ヒットに
は恵まれなかった。ただ、ギ
タリストとしては、人気アイ
ドルグループ「嵐」のレコー

今、居酒屋や中華料理店、
ラーメン店など、コロナ禍で
疲弊した個人商店を会場にし
た「さしむかいコンサート」
にも力を入れる。「コンサ
ートを通じて、お客さん同
士のつながりも生まれてい
る」。閉鎖的だった社会で、
人と人の出会う場を提供でき
ていることに誇りも感じてい
る。

「これで人生終わるとは全
然思えない。何かまた展開す
るんだと思う。ものすごく違
う人生に」。還暦を過ぎて、も
とミュージシャンとしての挑戦
は続く。
(常陰亮佑)



◇やまぐち・いわお 1963年生まれ。天童市出身。同市
内で妻と2人暮らし。趣味はスキーで、子供の頃は大会の選
手として大会にも出ていたが、東京に出てからあまり滑
っていなかった。地元に戻り、再び本格的に取り組むよ
うになった。「何も考えず無になれる時間が好き」